

夏目漱石の欧州航路

——西洋建築との出会い

青木 剛

旅と情報

一九〇〇年（明治三十三年）九月八日、イギリスに向けて横浜港を出発した漱石にとって、西洋文明との衝撃的な出会いは、すでに欧州航路において始まった。つまり、ナポリで初めてヨーロッパの地に足を踏み入れる以前に、上陸した寄港地で目撃した西洋化の進捗度は、漱石を驚嘆させるに十分だったのである。イギリス、フランス、アメリカの租界であった上海、イギリス単独の植民地・租界であった香港、シンガポール、コロンボは、開港が日本より早いだけでなく、西洋化もはるかに進んでいた。（漱石を乗せた北ドイツ・ロイド社のプロイセン号は、ペナン、アデン、スエズ、ポートサイドにも立ち寄るが、乗客が上陸する時間はなかった。）

その手放しとも言える驚きようを見ると、一つの疑問が生じる。漱石、ひいては同時代の日本人は、どれほど海外の情報に接する機会があったのだろうか。

たとえば、漱石はナポリで教会を見学した時、妻に宛てた一〇月二三日の書簡に「殊にNaplesの寺院等の内部の構造は来て見ねば分り兼候」¹⁾と書いている。「見ねば分り兼候」というのは、たんに百聞は一見にしかずということかもしれないが、少なくとも漱石は教会内部のイメージを脳裏に描くのに十分な情報は持ち合わせていなかったということである。

一方、教会の外部については、出航前から漱石には一定のイメージがあった。漱石は大学進学を前に建築家を志そうとした時期があったが、友人に「日本でどんなに腕を揮ったって、セントポールズの大寺院のような建築を天下後世に残すことはで



図1 「聖パウルス寺の景」(『世界旅行萬國名所圖繪』)

きない」と説得され、英文科に進路を変更した²⁾。このエピソードから、当時、大学進学を目指すような若者たちがセント・ポール大聖堂のイメージを共有していたことが分かる。では、なぜセント・ポールなのか。明治一八年出版の『世界旅行萬國名所圖繪』(青木恒三郎編、高山堂)の第二巻、「歐羅巴洲の上」には、「^{セント}聖パウルス寺の景」の銅版画が見開きで掲載され、説明書きには「聖ポールス^{セント}てふ寺は耶蘇新教寺院にて、地球上にかくれなき、いと有名の巨利^{きり}なり」とある(図1)。同様に、明治三年の『萬國名所圖繪』(尾関トヨ編、豊栄堂)にも、セント・ポール大聖堂は、銅版画とともに「大英国倫敦の東部にありて、地球上隠れなき耶蘇の大寺なり」と紹介されている。漱石がこれらを目にしたことを示す資料は残っていないが、明治の中頃以降、セント・ポール大聖堂を世界的な巨大教会として紹介する出版物が流布して、漱石がそうしたものに触れる機会があったことは言える。

英文科に進んだ漱石は、(洋書)を通して西洋建築の知識を深めていった可能性はある。しかし、建築学を諦めた漱石が、教会の内部を手取るように思い描けるような専門的な情報に接する機会はまれだっただろう。明治三年の日本が、さまざまなメディアを通して海外の情報に溢れている現在とは程遠い状況にあったことはもう一度確認しておく必要がある。

教会の例についてもいえることだが、特にビジュアルな情報は少なかつた。漱石は、コロンボに停泊中のプロイセン号に

やって来たコブラ遣いについて日記に次のように記している。

甲板上に印度の手間師来り連りに戯を演ず。日本の豆蔵と大同小異なり。ただざるの中よりコブラを出して手足に纏いつける様、あたかも手間師と豆蔵とを兼たるが如し。か
Standard Dictionary 中にあるコブラの画と同一なり。
(一〇月二日)

漱石は、英語辞典の挿絵以外にコブラのイメージを見たことがなく、また、挿絵で見たものの実物に接することは、日記に記録しておく価値のある経験だったのだ。

といっても、その一方で、欧州航路を行く旅行者が寄港地で出会うような事物を写真で紹介する出版物が現れ始めていたことも確かだ。明治二八年創刊の当時としては先端的なビジュアル誌であった『太陽』には、すでに漱石がイギリスに向けて旅立つ以前に、上海、香港、シンガポール、コロンボなどの代表的な光景が口絵として掲載されている。たとえば、漱石の日記には、熱帯地方らしいコロンボの印象が次のように書かれている。

バナナ・ココーの木に熟せる様を見る。頗る見事なり。道路の整える、樹木の青々たる、芝原の見事なる、固より日本の比にあらず。

同様の光景は、漱石に遅れること約二週間、同じ北ドイツ・ロイド社のハンブルク号でドイツに向かった巖谷小波も日記で触れているが、小波はすでにそうした光景を『太陽』の口絵で見ていた。

これは波止場を去る七哩半で、もうコロンボの在であるが、その代り途中の景色の良き、椰子の岡、バナナの畑、蓮の沼、合歡の林、時には又印度特有の榕樹(俗に章魚の樹と云って、枝から根の垂れ下がって居る奇木)、秋を知らぬ顔に茂って居る景色、今までは太陽の口画で許り見たのを、今正物でお目にかかるのだから、往復三時間許りの行程も、決して飽く事は無いのである。⁽³⁾

小波が見た口絵は、明治三〇年一〇月(三卷二二号)に掲載された「印度錫蘭風土」であろう。旅行が既得情報の追認となりつつあることを示す早い例として興味深い一節であるが、それが「今までは太陽の口画で許り見た」光景であることに当時の状況がうかがわれる。絵葉書的な海外の光景の写真でさえ、『太陽』の継続的な読者でもないかぎり、見る機会がなかったかもしれない時代であった。

上海

漱石の西洋建築との衝撃的な出会いは、上海で始まる。プロイセン号は呉淞に停泊し、漱石たちは小型の蒸気船で黄浦江を遡る。

小蒸汽にて濁流を遡り、二時間の後上海に着す。満目支那人の車夫なり。

家屋宏壮、横浜などの比にあらず。

税関に立花政樹氏を訪う。家屋宏大にて容易に分らず困却せり。(『日記』九月二三日)

見渡すかぎりの人力車夫が小蒸気の到着を待ち受けていたのは、「小波の日記」に「仏蘭西波止場」として記された場所である。それは、共同租界からフランス租界に入っすぐのところであり、そこから漱石が「税関」と呼ぶ江海関までは数百メートルしかなく、漱石に同行した芳賀矢一の日記によれば、一行はそこまで徒歩で行った。

「家屋宏壮」とは、その間の印象であろう。実際、船着場から江海関までは、上海クラブ、大清銀行、香港上海銀行、江海関、その向うの独亜銀行(この建物はもとほマーカントイル銀行が使用していた)など、当時の上海では有数の建物が立ち並んでいた(図2・3)。漱石は上海のバンドを歩きながら、見上

げるとような建物の大きさに圧倒されたのである。

そして、「横浜などの比にあらず」とあるように、漱石はこの光景を横浜のバンドと比較している。横浜を出航したのはわずか五日前のことであり、大栈橋、あるいは船の上から見た横浜のバンドの光景は、まだ鮮明に記憶に残っていたはずである。「家屋宏壮」とは、まず建物の高さの違いである。一九〇〇年頃の横浜のバンドでは、建物の多くは二階建てで、平屋も少なくなかった。一方、上海のバンドは、三階建てが主で、独亜銀行のように四階建のものもあった。これに加えて、デザインや素材にも違いがあった。横浜の場合、ヴェランダ植民地様式のグラランド・ホテルなどを除けば、多くが四角い木造建築の上に寄棟屋根を載せ、わずかに石張りの外壁に西洋的な意匠を取入れた擬洋風の域を出ないものだった。これに対して、初期の頃から石やレンガが用いられていた上海では、デザインの間でもすでにヴェランダ植民地様式を脱却し、一八九〇年代には江海関のゴシック・リヴァイヴァルや大清銀行のクウィーン・ラン・リヴァイヴァルの時代に入っていた。

漱石の渡航日記に限らず、旅行記ではしばしば比較が行われる。それは、これまで経験したことがない事物に出会った時、人はまず記憶のストックから相似物を探し出そうとする傾向があるからだろう。そして、たとえ相似物が見つかったとしても、それが初めて出会った事物とあまりに遠い時、相似性よりはむしろ差異が意識される。横浜と上海は同じバンドでも、漱石の



図2 上海の香港上海銀行



図3 上海の江海関(左)と独垂銀行(右)

目にはそれ程までに異なるものと映ったのである。さらに、漱石は、東京大学英文科の最初の卒業生であった立花政樹に面会するため訪れた江海関についても、「家屋宏大にて容易に分らず困却せり」と書いている。ある意味ではほほえましい感想であるが、建物の中で道を失うことによって、漱石は身体感覚として西洋建築の巨大さを経験したとも言える。旅行者にとって建築は基本的に〈見る〉ものであるかもしれないが、その中で行動することによって、活動し、生活する場としての差異を次第に認識していったのである。

香港

その後の日記でも、漱石は西洋建築に対する感嘆の声を何度となく繰り返している。ロンドンに到着するまでの間でも、「宏壮」という点で上海を凌ぐ都市は少なくなく、漱石はそうした都市を目にするたび、その驚きを日記に書き残したのである。

上海の次に上陸した香港もその一つだった。芳賀矢一は、香港を上海と比較して次のように述べている。

香港の市街たる繁榮は上海に及ばざるが如しといへども、巍然たる層樓相連なりて、昇降にはエレヴェーターを用ふ。全屋悉く大理石なるが如きは、欧米の大都といへども及び難かるべし。⁽⁴⁾

漱石同様、海外経験のない芳賀が、香港の建築が欧米の大都市のものに優るとした根拠は不明だが、山を背負い、平地が少なく、また、花崗岩が産出した香港で、早くから石造りの「層樓」が発達していたことは確かである。

日記に記された漱石の香港の印象は次のようなものである。

山嶺さんてんに層樓の聳ゆる様、海岸に傑閣の並ぶ様、非常なる景気なり。(九月一九日)

これは、プロイセン号が停泊した九龍側から香港島を見た光景である(図4)。漱石が訪れた時、香港島の中心街では埋立により「新たな海岸通り(New Quay)」の開発が進んでいた。埋立はほぼ終わり、香港クラブ(一八九七年竣工)やクウィーンズ・ビルディング(一八九九年竣工)を含む数棟の真新しいビルが聳えていたが、まだ更地のままの部分が多かった。そのため、海側からは、「古い海岸通り(Old Quay)」にあった、一世代前の商館や六階建ての香港ホテルなどの「傑閣の並ぶ様」が見えた。漱石一行が食事をした日本旅館鶴屋について、芳賀は「海岸通り五層樓に在り外觀甚だ美なり」と記しているが、これも「古い海岸通り」にあった。

しかも香港では、新旧の海岸通りだけでなく、山頂にも「層樓」が聳えていた。翌日、ヴィクトリア・ピークに登った漱石たちは、これらの建物を間近に見ることになる。再び芳賀によれば、ケーブルカーを降りて山頂に至る光景は次のようなものである。

峰上 Peak Hotel あり。更に進むこと少許、兵營あり。……元來香港は海上の一島にして全島花崗岩なり。樹木繁茂するもの少なけれども雜草矮木全山を掩ふ。処々丘陵を開きて高樓大厦を架す。皆英人の家にして多くは兵營に関する士官の住居たり。



図4 香港の「海岸に傑閣の並ぶ様」

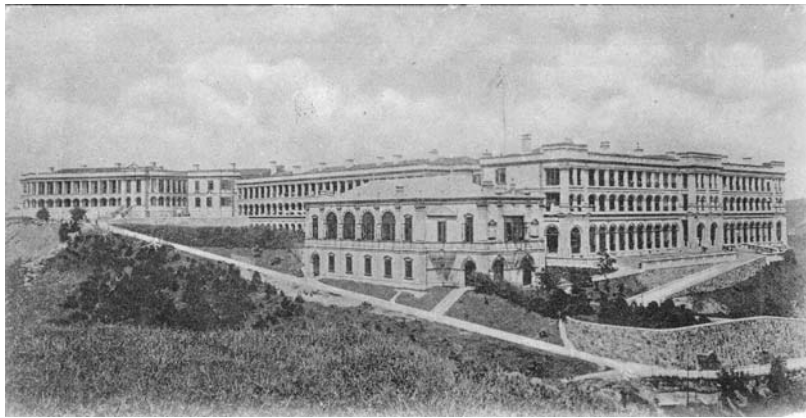


図5 香港の「兵営」

「兵営」は、マウント・オースティン・ホテルとして建てられた建物を買い上げたもので、有名なビーク・ホテルよりもさらに「宏壮」なものであった(図5)。

漱石が上海では個々の建物の大きさに感嘆したとすれば、香港の印象を記した上記の一節には、島全体を自分たちのものとして作り変えてゆく西洋文明の圧倒的なダイナミズムに対する驚きを読み取ることができるのではないか。

この一節に続いて、漱石の日記には、同じ場所から見た夜景が描かれている。

船より香港を望めば万燈水を照し空に映ずる様、綺羅星の如くといわんより満山に宝石を鏤めたるが如し。diamond及びrubyの頸飾りを満山満港満遍なくなしたるが如し。

これは単に、当時すでに有名であった

香港の夜景の美しさを描いたものではない。妻への手紙には、この夜景について次のように述べられている。

上海も香港も宏大にて立派なることは到底横浜・神戸の比には無之、特に香港の夜景などは満山に夜光の寶石を無数に鏤めたるが如くに候。(九月二七日)

ここでは、香港の夜景は、上海と香港の「宏大にて立派なること」の一部として、というより、その中でも特筆すべきものとして語られている。漱石は、無数のガス灯と電灯によって島全体にちりばめた夜景の美しさにも〈文明〉の力を見出していたのである。

シンガポールとコロンボ

香港の後に上陸したシンガポールとコロンボについては、漱石の日記には建物や街並みの「立派」さに触れた記述はない。それは、一つには熱帯地方に至った漱石の関心が、自然、特に植物に惹きつけられたからである。妻宛の書簡では、シンガポールについて次のように触れられている。

熱帯地方の植物は名前のみを承知致候が、来て見れば今更

の如くその青々と繁茂せる様に驚かれ候。(九月二七日)

ここでは、熱帯植物への関心は、それを初めて見る驚きとして語られているが、同様の感想はコロンボについても繰り返される。

熱帯地方の植物の見事なる事は今更のように驚かれ候。

(二〇月八日)

すでに別稿で論じたので、ここでは詳しく述べることはしないが、漱石はロンドンでも植物を求めて下宿の周辺を歩き回っている⁵⁾。シンガポールとコロンボで植物へ向けられた関心は、そうした漱石の欲求が、熱帯地方の自然に触れて呼び起こされたと言えるだろう。

日記に「立派」な建物や街並みへの言及がないもう一つの理由は、そうしたものを測る尺度が、すでに上海や香港を基準にしたものに変わっていたからである。シンガポールとコロンボの都市景観は、「立派」さにおいて上海や香港には劣るにしても、横浜や神戸には明らかに優っていた(図6)。この点、芳賀の観察はあくまで客観的である。

〔シンガポールの〕市街の美もとより上海、香港には及ばざれども尚大廈の空に聳ゆるもの多し。全市の幅大は遙か



図6 シンガポールのバンド



図7 シンガポールのラッフルズ博物館

に両港に超えたるべし。

〔コロンボの〕市街の繁栄は上海に同じ。然れども家屋の宏壮なるもの少し。地勢広潤なるを以て香港の如き高樓を築く必要はなきなるべし。大体の様子は新嘉坡に似たりというべし。然れどもその整頓せるは新嘉坡に過ぎたり。

これに対して、漱石の日記では、むしろ「立派」でない建物への言及が目立つ。シンガポールの植物園を見物した漱石は、ラッフルズ博物館を訪れる(図7)。

それより博物館を見る。余り立派ならず。(九月二十五日)
また、コロンボで休憩したホテルは次のように描かれる。

British India Hotel というところに至る。結構大ならず、中流以下の旅館なり。(一〇月一日)

建物を(見る)経験は、それが一回限りのものであっても記憶に刻まれるものである。すでに上海と香港の街並みに瞠目した経験のある漱石にとって、シンガポールとコロンボ街並みには驚くべきものはなく、かえって上海や香港に劣る部分のみが印象に残ったのである。

ナポリとジェノヴァ

紅海とスエズ運河を過ぎ、ナポリに到着した漱石は、「この地は西洋に来て始めて上陸する地故それほど驚きたり」(一〇月一日)と、何度目かの驚きを日記に記している。いよいよヨーロッパに辿り着いたという感慨は別にしても、初めて目にした西洋建築で満たされた都市空間は、実際、驚きであっただろう。ナポリだけでなく、「以太利の小都会なるにも閑せず頗

る立派にて日本などの比にあらず」(一〇月二三日 夏目鏡子宛書簡) というように、ジェノヴァに至っても驚嘆は続く(図8)。

こうした驚きの中で、漱石はそれまでの植民地や租界では得られなかった西洋建築の経験を積み重ねてゆく。ナポリは半日の滞在にすぎなかったが、漱石が見物した建物をたどると、いわば西洋建築の歴史を駆け足で見ていることが分かる。

Naples に上陸して cathedrals を二つ、museum 及び Arcade、Royal Palace を見物す。寺院は頗る荘厳にて、立派なる博物館には有名なる大理石の彫刻無数に陳列せり。かつ Pompeii の発掘物非常に多し。Royal Palace も頗る美なり。道路は皆石を以て敷きつめたり。(一〇月一日)

教会は中世、王宮と博物館は一七世紀初めの建物であり、「アーケイド」はバサージュの流行が遅れてイタリアに至ったもので、(現代)を感じさせる観光名所のひとつだった。このウンベルト一世ガレリア(図9)は、巖谷小波も訪れている。

殊に驚いたのは、ガレリー(浅草の中店の様な遊場)の壮大な事だ。瑠璃^{ガラス}の天井は見上げるに首が痛く、大理石の床は行くに足も疲れる許り。広さと美しさと賑やかさには、只開いた口が閉がらない。



図8 ジェノヴァの港



NAPOLI - Galleria Umberto I - Interno.
 図9 ナポリのウンベルト一世ガレリア



図10 ジェノヴァのグラン・ホテル・ド・ジェヌ(左)

さらにジェノヴァでは、西洋建築を（見る）だけでなく、その中で（生活する）ことを初めて経験する。上海での東和洋行を除いて、寄港地のホテルに宿泊したことがなかった漱石には、本格的な西洋建築に滞在するのはこれが初めてだった。

薄暮上陸、Grand Hotelに到着。宏壮なるものなり。生まれて初めてかような家に宿せり。（『日記』一〇月十九日）

Grand Hotel de Genes は、エレベーターのある、ジェノヴァの高級ホテルの一つであったが、（見る）だけの対象としては必ずしも「宏壮」と印象ではない（図10）。しかし、短期間とはいえ生活をする「家」としてひとしおの感慨があったのである。

パリとロンドン

ナポリやジェノヴァより一層「大都」であるパリとロンドンに対して、漱石はまた驚嘆の声を発することになるが、その記述はこれまでのものとは明らかに異なっている。妻宛の書簡にはパリは次のように描かれる。

パリに来て見ればその繁華なることこれまた到底筆紙の

及ぶ所に無之、就中道路家屋等の宏大なること馬車・電気
鉄道・地下鉄道等の網の如くなる有様まことに世界の大都
に御座候。(一〇月三日)

「家屋等の宏大なること」という表現は、上海や香港と変わら
ないともいえるが、パリの場合、「宏大」な建物がどのもの
をさしているかは特定できない。日記においても、パリの個々
の建物に対する印象が記されることはない。すでに西洋建築に
親しんできた漱石は、巨視的な眼差しでパリの街並みの印象を
記しているのである。

ロンドンについても、妻への書簡では、ほぼ同様の感想が述
べられる。

倫敦の繁盛は目撃せねば分りかね候位、馬車・鉄道・電
気地下鉄・地下電鉄等蛛の糸をはりたる如くにて、なれぬ
ものにはしばしば迷い途方もなき処へつれて行かれ候事有
之險呑に候。(二月二六日)

ただし、パリについて書かれた「道路家屋等の宏大なること」
に相当する表現は見られない。実際、オスマンの大改造を経た
パリの道路や家屋は、ロンドンよりも「立派」であった。

それだけでなく、漱石は到着早々からロンドンの街並みに
「いづらい感じ」を抱いていた⁶⁾。『永日小品』に収められた

「暖かい夢」には、下宿が見つかるまで滞在したスタンリー・ホ
テルがあったガウアー・ストリートが次のように描かれている。

自分はそのそ歩きながら、何となくこの都にいづらい感
じがした。上を見ると、大きな空は、いつの世からか、仕
切られて、切岸のごとく聳える左右の棟に余された細い帯
だけが東から西へかけて長く渡っている。その帯の色は朝
から鼠色であるが、しだいに日に蒼色に変じて来た。建
物は固より灰色である。それが暖かい日の光に倦み果てた
ように、遠慮なく両側を塞いでいる。広い土地を狭苦しい
谷底の日影にして、高い太陽が届く事のできないように、
二階の上に三階を重ねて、三階の上に四階を積んでしまっ
た。小さい人はその底の一部分を、黒くなつて、寒そうに
往来する。自分はその黒く動くものうちで、もつとも緩
漫なる一分子である。

ロンドン大学に近いガウアー・ストリートは、学者、医者、
弁護士などが多く住むテラス・ハウスが立ち並ぶ住宅街で、ス
タンリー・ホテルはそうした住宅をホテルに転用したものだっ
た。漱石には、自分が生活する「家」として煉瓦造りの四階建
て自体に違和感があったが、ガウアー・ストリートでは、それ
が通りの両側に延々と続いている。その間に立つて空を見上げ
た漱石は、こうした街づくりに対して人間の尊厳を傷つける不

自然さを感じ取っていたのである。

漱石の西洋体験はロンドン到着から始まったわけではない。少なくとも西洋建築の経験については、最初の寄港地、上海から始まり、〈驚嘆〉を基調としながら、多様な建物に接することによって、短期間のあいだに急速に深化してゆく。そうした経験がなかったならば、ロンドンに到着するとはほぼ同時に、近代都市の「いづらい」面に注目することもなかったであろう。

注

(1) 夏目漱石『漱石日記』(岩波文庫)。漱石の作品の引用は、

すべて岩波文庫によった。

- (2) 若山滋『漱石まちをゆく——建築家になろうとした作家』彰国社、二〇〇二年、六五ページ。
- (3) 巖谷小波『小波洋行土産』博文館、明治三六年、五三ページ。
- (4) 芳賀檀編『芳賀矢一文集』富士房、昭和一二年、六一九ページ。
- (5) 青木剛『ロンドンの田園と夏目漱石』『明治学院大学 英米文学・英語学論叢』第一一六号(二〇〇五年)。
- (6) 青木剛『原点としてのガウアー・ストリート——夏目漱石とロンドンの『家』』『明治学院大学 英米文学・英語学論叢』第一一四・五六合併号(二〇〇五年)。